真・恋姫†無双 －Rise of dragon－

クラウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　－Ｒｉｓｅ　ｏｆ　ｄｒａｇｏｎ－

【Ｎコード】
Ｎ１６０５Ｚ

【作者名】
クラウン

【あらすじ】
後漢末期。
数多の諸侯が群雄割拠した時代に、古の民がいた。
人々は、その者達を『龍の民』と言った。

Ｅｐ．１　『古の崩壊』（前書き）

恋姫無双の二次創作です。

さっそくシリアスですが、お楽しみください。

Ｅｐ．１　『古の崩壊』

時は乱世。

朝廷の力は腐敗し、数多の諸侯が群雄割拠する動乱の時代。

その時代に、古より大陸の平和と秩序を守ってきた民がいた。

彼らは『龍の民』と呼ばれていた。

その身に龍の力を宿いし神聖な者たちである――――

しかし、彼らもまた滅亡の道へと歩むことになった――――

その日は、雨だった。

生きる人皆、その身が濡れないように家の中へと入っていった。

しかし、ある村は違った。

その村は、雨だというのにその身を濡らし、地面に伏せ、紅い血を流していた。

皆、息絶えていた。

その村から少し離れた丘。

そこに、剣を一本携え、七、八歳ほどの子供を連れた女性がいた。

女性と子供は何かに逃げるように走っていた。

彼女達の後方からは、身の丈ほどの大きさの鎌を持った外套で身を隠した者が追って来ていた。

女性と子供は走るが、やがて、丘の頂上に来てしまい、逃げ場を失う。

前方には切り立った崖と、その下を流れる川があった。

外套を纏った者は、二人に追い付いた。

そして、口を開いた。

「諦めろ。大人しくその血を我に捧げろ。貴様ら『龍の民』に流れる『龍の血』を。さすれば我は解放される」

その声は、脳の中に直接響いてくるような異様な声音だった。

「誰があなたなんかに……！！」

女性は、その顔を憤怒に歪めて”その者”に言い放った。

「よくも村の皆を……よくもあの人を……！！」

「悔しいか？　恨めしいか？　ならばどうする？　仇を取るか？」

”その者”は、女性の怒りを嘲笑うかのように言う。

「……残念だけど、私はそこまで馬鹿じゃない」

女性はそう言うと、その体を後ろに隠れていた子供に向ける。

そして、優しく言った。

「良い？　あなたを一人にしちゃうけど、きっと龍があなたを守ってくれる。龍だけじゃない、母さんも父さんも、村の皆もあなたを見守ってくれるわ」

柔らかな表情で言う女性。

しかし、子供には全くその言葉が理解できなかった。

「えっ？　母さん……何言って……」

子供は動揺する。

すると、女性は携えていた剣を子供に渡した。

「これを絶対手放しちゃダメよ。何があろうと、決して手放しちゃダメ」

女性は言い聞かせるように言った。

子供はうん、うんと大きく頷く。

そして、女性は涙を流した。

「本当は、あなたが大きくなるまで一緒にいたかったけど、無理みたい……」

大量の涙を流しながら、女性は言葉を続けた。

「きっと、大きくなったらお父さんみたいに良い男になるんだろうな……」

”その者”が近づいてくる。

「元気でね。私達がいなくてもしっかりと生きるのよ、朧」

女性は、子供を突き飛ばした。

子供は、足場を失い川に一直線に落ちていく。

「母さん!?　母さーーーーんっ!!!!」

子供が最後に見た女性の――――母の顔は、斬られながらも苦痛に顔を歪めず、優しくずっとこちらに微笑んでいた。

Ｅｐ．１　『古の崩壊』（後書き）

プロローグでした。

シリアス率１００％でしたね…

次回はそれほどシリアスじゃないです。

次回もよろしくお願いします。

Ｅｐ．２　『漂着』（前書き）

第二話の投稿です。

楽しんで見てください。

Ｅｐ．２　『漂着』

場所は河東郡。

その地に位置するある村から少し離れた河原に、一人の男がいた。

その男の体は大きく、顔には貫禄のある無精髭と右目に傷があり、その手には釣竿が握られていた。

「昨日の雨で少し心配したが、氾濫は無し。絶好の釣り日和だな」

男は、嬉しそうに顔をにやつかせ座れる場所を見つけるとそこに座って釣りを始めた。

「大量だと良いんだが……」

二刻ほど経っただろうか、男の籠の中にはある何匹もの魚がいた。

「へへへッ！　大量だぜ！このまま大物も釣っちまうか！」

男はご機嫌そうに言う。

すると、竿に何かが引いた。

男は、それを確認すると素早く釣竿を掴み引っ張る。

「重てぇ！　へへッ！　こりゃあ大物だな！」

男は渾身の力で引き上げる。
そして竿に引っ掛かったものの正体を確認した瞬間、驚きで固まってしまった。

「……ガキ！？」

竿にかかったのは、身体中に傷をつけ、しかし、それでも一本の剣をその手から離そうとしない七、八歳ほどの少年だった。

河東郡に位置する村、常平村。

その村の外れにある一軒の家に一人の女性と、一人の七歳ほどの少女がいた。

二人は今、夕食の準備をしていた。

「下準備はこれくらいね。あとはお父さんがお魚を捕って来るのを待ちましょうか」

「はい！」

女性がそう言うと、少女は元気良く返事をした。

しばらく待っていると、慌てて走ってくるような音が聞こえてきた。
そして、玄関の扉が勢い良く開き、釣りをしていた男が入ってきた。
「大変だ！！　椿！！　大変だ！！」
男は、必死な形相で女性――――椿に話しかけた。
「どうしたんですか？　大変だだけじゃ分かりませんよ。お魚はちゃんと釣ってきたんですか？」
と、必死な男に対して冷静に受け答えする椿。
「ああ。聞いて驚け！　魚なら大量に釣ってきたぜ！……じゃなくて！！　椿、見ろ！！」
そう言って椿達に背中を見せる。
彼女達は、背中に背負っている少年に目を丸くした。
「源さん。その子……」
「ああ。魚釣ってたら……」
「誰のうちから誘拐してきたんですか！？」
瞬間、家の空気が凍った。

Ｅｐ．２　『漂着』（後書き）

少し終わりが中途半端ですけど、話の流れ的に仕方がありませんでした。

次話でしっかりフォローするつもりなので勘弁してください。

キャラ設定（前書き）

キャラ設定です。

キャラ設定

姓・鳳
名・仙
字・烈覇
真名・朧
武器・龍刀『白龍』
イメージＣＶ：神谷浩史

古より大陸の平和と秩序を守ってきた『龍の民』の生き残り。
右腕に龍紋の痣がある。

ある日、村が滅ぼされるが、その日の記憶がない。

愛紗のいる村に流れ着き、愛紗の家で暮らすことになる。

しばらくして、村が賊に襲われた際に通りかかった丁原に弟子入りする。

武力は鳳仙≧呂布
知力もそこそこある。
名・源

イメージＣＶ：天田益男

愛紗の父。

川で釣りをしていたら朧が釣れたので拾った。
豪快で破天荒な人だが、村の人達の信頼が篤い。
現役時代は地方で武官をしており、愛紗・朧（主に愛紗）の武の師匠。
名・椿
イメージＣＶ：福井裕佳梨
愛紗の母。
気立てが良く、家庭的な人物で、母親の鑑とも言われている。
しかし、その反面、勘違いや被害妄想が盛大で、当初、朧を”源が誘拐して連れてきた子”だと思っていた。

キャラ設定（後書き）

一応こんな感じです。

このあともキャラ設定はちょくちょく入れていきたいと思います。

Ｅｐ．３　『保護』（前書き）

遅くなりました。

第三話の投稿です。

楽しんでください。

Ｅｐ．３　『保護』

「何だ！　川で拾った子供ですか！　びっくりしました！　てっきり源さんが誘拐してきたのかと思ってしまいましたよ！」

言う椿に対し、源は若干青くなりながらため息をはいた。

「びっくりしたのはこっちだっつうの……何で帰ってきていきなり人さらい呼ばわりされなきゃならないんだよ……」

「でも、本当にどこの子なんでしょう……村の子じゃないですよね？」

「ああ、違うな。きっと違う村の子だ。歳は愛紗と同じくらいだな」

「だいじょうぶなのですか？　ちちうえ」

愛紗が今だ起きない少年に対して心配して聞いた。

「ああ。息はしてるから死んじゃいねえ」

と、源は愛紗の頭を撫でて言う。

「……う……ん……」

すると、少年の眉が動き、徐々に目が開いてきた。

「おっ！　起きたか。おい、大丈夫か？」

源が少年の顔を覗き込む。

「……ここは……？」

少年は顔を動かし、辺りを見回す。

「ここは常平村。そんで俺んちだ。坊主、名前は？」

「……鳳仙……」

「そうか。鳳仙、お前、川から流れ来たんだが、一体お前の住んでいた村で何があった？」

「……わからない……」

源の問いかけに対し小さい声で答えていく鳳仙。

源は、二、三質問したあと考え込むように腕を組んだ。

「う～む……記憶喪失にしては不自然だな……」

「？　どこがですか？」

源の言葉に椿が質問した。

「記憶喪失なら自分の名前も忘れるだろ。だけど名前は覚えてる。忘れてるのは自分の住んでいた村と両親なんかが主だ」

「ということは、この子の村で何かがあったのかしら？」

「そうかもしれねえな。思い出すことを自分で拒否してる」

「どうしますか？　受け取り手がいないなら、うちで引き取りますか？」

「そうだな……とりあえず、うちで預かることにしよう」

こうして、源と椿は鳳仙を預かることにした。
しかし、一月ほど経っても鳳仙の親や関係者などが来ることはなく、二人は鳳仙を引き取ることにした。

最初は心を閉ざしていた鳳仙だったが、源と椿、そして愛紗の優しさに触れ、徐々に心を開いていった。

そして、一年経つ頃には本当の家族のように打ち解けていた。
真名も交換した。
鳳仙の真名は朧と言った。

Ｅｐ．３　『保護』（後書き）

第三話でした。

感想、コメント等お待ちしています。

Ｅｐ．４　『四年後』（前書き）

最新話です。

ちょっと内容が薄いような……

Ｅｐ．４　『四年後』

四年後――――

常平村の外れにある一軒の家。

そこに三人の人間がいた。

一人は大柄で、手に青龍偃月刀が握られていた。
もう一人は女の子で、大柄の男と同じような偃月刀を握っており、
もう一人は女の子と同じくらいの年の少年で、その手に一本の刀が握られていた。

「はあっ！！」「てやあっ！！」

少年と少女は、男に向けて突撃する。
接近すると同時に、武器を振るう。

「甘い！！」

が、男は、慌てることはなく、青龍偃月刀を振るって斬撃を止める。
そして、止めると同時に二人を吹き飛ばした。

「よーし！　今日はここまでだ」

男の声が響き、打ち合いが終わった。

「「ありがとうございました！！」」

少年と少女は、男に礼を言った。

「いや～、愛紗も朧もずいぶん強くなったな」

稽古をつけていた男―――源が愛紗と朧に言う。
源にそう言われた二人は、嬉しそうに笑った。

「いえ、父上、朧の方が私より強いです」

「そんなことないよ。愛紗だって強いよ」

「いや朧が…」「いや愛紗が…」と、お互いを譲り合う二人。
そんな二人を見て源は豪快に笑った。

「ガハハハッ！！　ちゃんと二人とも強くなってッから安心しろ！」

「ほんとですか？！　父上！」

「あたりめえよ！　なんたって俺が教えてるんだからな！」

笑い合う三人。
すると、家の中から椿が出てきて三人を呼んだ。

「源さーん、愛紗ー、朧くーん、夕食の準備ができたからそろそろ中に入ってちょうだい」

「おう、わかった。よし！　飯にするぞ！」

そう言うと、源は家の中に入っていった。

「朧、行こう」

「うん！」

愛紗と朧も仲良く中に入っていった。

～朧　Ｓｉｄｅ～

椿おばさんに呼ばれて、源おじさんが家の中に入っていった。

四年前、僕はこの常平村に流れついた。

名前は鳳仙、字は烈覇、真名が朧ということしか分からなかった。

どうしたら良いか分からなかった。

故郷の事も親の事も分からない。

思い出そうとすると頭が痛くなって考えることができなくなる。

僕の傍にあったのは一本の剣だけ……

こんな物が手掛かりになるはずがない。

どっからどう見ても怪しい子だ。

でも、ここの人達はみんな優しい。

よそ者の僕を快く歓迎してくれた。
すごく嬉しかった。
だから、最初こそ閉ざしていた心も、その優しさに触れ、徐々に開いていった。
僕はこの村が好きになった。
いつも笑顔が溢れているこの村が。
だから僕は、この笑顔をなくさないため、源おじさんに頼んで愛紗と一緒に武の修行に励んでいる。
「朧、行こう」
愛紗が僕に言う。
愛紗のこの笑顔も僕は好きだ。
だから、一層強くなろうという気持ちになれる。
護るんだ、この笑顔を。
「うん！」
僕は、そんな思いを抱きながら愛紗の呼び掛けに強く返事をし、二人で中に入っていった。

Ｅｐ．４　『四年後』（後書き）

次回はオリキャラが一人出てきます。

Ｅｐ．５　『弟子入り』（前書き）

第５話です。

どうぞ

Ｅｐ．５　『弟子入り』

今日もいつも通り、源に稽古をつけてもらい、皆で夕食を食べていた時の事だった。

「賊だー！！　賊が出たー！！」

「「「「っ！！」」」」

突如もたらされた知らせに四人は身をこわばらせた。
源は立ち上がり、青龍偃月刀を手に取った。

「椿！　愛紗と朧を連れて地主の家に避難しろ！」

常平村は賊に襲われた際、地主の家が村で一番広いためそこに避難するようになっている。

椿は源の言葉に頷くと愛紗と朧の手を取った。

「父上！！」

愛紗が源を心配して名を呼ぶ。
源は愛紗にその体に似合わない笑顔を向けた。

「心配すんな。父ちゃんがパパっとやっつけてくるからよ！」

そう言うと、源は出ていった。
すると、朧が椿の手をほどき、源のあとを追っていった。

「だめよ！！　朧くん！！」

「朧！！」

椿と愛紗が呼び止めるが、朧は振り返らなかった。
村の人々が地主の家に避難していく。
源は逃げてくる人々に指示を飛ばしながら村の入り口の方へ走っていく。

「急いで避難しろ！！　荷物は軽くしとけ！！」

「源おじさん！！」

「なっ！？　朧、どうしてここに！？」

源は本来ここにいないはずの人間がいることに戸惑う。

「僕も戦う！」

「馬鹿野郎！！　お前が来たところでどうにもなん音ーよ！！」

「でも、賊の一人や二人くらいなら……」

「あのなーっ！！……！！　てりゃあっ！！」

言いかけたところで賊が三人ほど源の後ろから襲いかかった。
源は一瞬驚くも、振り向きざまに賊を袈裟斬りにし倒す。
賊は悲鳴をあげ地に伏せる。
すると、辺りからぞろぞろと賊達が出てきた。

「いいか。確かにお前なら賊の一人や二人、簡単に倒せるだろう……。だがな、この人数を相手にしたいんならもうちっと強くならなきゃダメだ」

ざっと見ても百人以上いるだろう。
源も冷や汗が頬を伝う。

「ちときついな……。朧、俺から離れるな！」

「は、はい！！」

賊達が一斉に襲いかかる。
源は、朧を後ろに下がらせ青龍偃月刀で敵をなぎ倒していく。

「おらーっ！！　こっから先は一歩も通さねぇっ！！」

まさに勇猛果敢という言葉がふさわしい武勇を振るう源。

しかし、勇猛なれど一騎当千ではない源は、次第に押され始め、足を負傷してしまう。

「ぐっ！！　し、しまった！　朧、逃げろ！！」

叫び、朧を逃がそうとする。
しかし、恐怖が朧の体を支配し自由を奪う。
朧は動けず、賊が朧の前に立った。

「やめろーッ！！！！」

源の叫び声が響き渡る。

しかし、その声が届くことはなく、剣が降り下ろされた。
朧は目を閉じ、後から来る痛みに備えた。

ザシュッ！！

肉を斬り裂く音が響いた。

「……な……に……」

しかし、血を吹き出し、倒れたのは朧ではなく、剣を降り下ろしたはずの賊だった。

「えっ……？」

朧は突然の出来事に目を開ける。
そこにいたのは、源ではない、大きな戟を構えた男性だった。

「大丈夫か？」

「えっ？　あ、はい…」

男性は朧に声をかける。
返事をしようにも、恐怖から解放された安堵から声が出なかった。

「誰だ、てめえ！！」

賊の一人が声を荒げる。
男性は、まるで汚物を見るかのような目で賊達を見た。
「貴様らのような下種共に名乗る名などない。去れ！　去らぬ者は我が戟の錆にしてくれる！」
戟を振るい、賊達を次々と薙ぎ倒す。
鬼神のような武力を見て、朧は言葉がでなかった。
（すごい！　なんて強いんだ…！）
朧は、男性を食い入るように見ていた。
”この人のように強くなりたい”と強く思った。

最後の賊が倒された。
周りには屍となった賊だった物が転がっている。
男性の体には、その賊達の返り血がかかっていた。
しかし、傷はどこにもついていない。
「怪我はありませんか？」
「ああ。助かった、ありがとよ」

「足の方は？　剣で斬りつけられたはずじゃ……」
「なに、こんな傷……ッつ！」
平気だと言おうとしたが、痛みに源は顔を歪める。
「おじさん！！」
朧が倒れそうになる源を支える。
「源さん！　朧くん！」
すると、椿が愛紗を手に引いてやって来た。
「椿！？　それに愛紗も……。なんで来た！」
「急に静かになったので心配になって……」
椿はそう言うと、源の怪我の治療を始めた。
「朧！！」
愛紗が泣きながら朧に抱きついた。
「あ、愛紗！？」
いきなりの愛紗の行動に驚き、顔を赤くする。
「バカッ！！　朧のバカッ！！　死んでしまったかと思った！！」

大量の涙を流しながら朧にすがり付くように抱きつく愛紗。

「愛紗……ごめん……」

そんな愛紗を朧は優しく抱き締めた。

「本当にありがとうございます。二人を助けてもらってなんとお礼を言ったらいいか……」

源の治療が終わったのか、椿が男性が声をかけた。

「いや、礼など無用です。助けられる命を見捨てることなどできない。それだけのことです」

「それでもです。良ければお名前を伺ってもいいですか？」

「もちろん。我が名は丁原、字は建陽と申す」

「丁原さん、良ければ今夜はうちでお泊まりになりませんか？　お礼もしたいので」

「ああ！　そうしてけよ！」

椿の言葉に源も賛同する。

「なら、お言葉に甘えるとしよう」

丁原も頷き、五人は来た道を戻っていった。

その晩、源の家で宴が開かれた。

外に出た村人達が源の家に野菜やら酒やらを贈ってくれてそのまま宴に発展した。そして、酒を全て飲み干した源達はそのまま力尽き、夢の中へと入っていった。

辺りは寝静まっている。

しかし、丁原は起きており、外に出て風を浴びていた。

「……あの」

そんな丁原に声をかける者がいた。

「君は確か……鳳仙だったか？」

「は、はい！　あの……」

「どうした？」

「ぼ、僕を弟子にしてください！」

そう言って朧は頭を下げた。

「なぜだ？」

朧の行動が理解できないのか、丁原は理由を聞いた。

「あの時、賊に殺されそうになったとき、なんて自分は無力なんだろうって思いました。でも丁原さんが助けてくれたとき、この人に武を習いたいって思ったんです。僕も丁原さんのように誰かを守れる力が欲しいんです！」

そう言ったあと丁原を見る。その目は、強い意志に満ちていた。

そして、朧の全身から氣が滲み出ていた。

（この氣は！？）

朧から発せられた氣を感じ、丁原は驚愕した。

「すまないが、右腕を見せてくれないか？」

「えっ？　あ、はい」

一瞬うろたえ、腕を見せる。

「こ、これは！？」

朧の腕を見て丁原は目を見開いた。

朧の右腕には龍のような形をした痣があった。

「こ、この痣は……」

「あの……この痣はこの村に流れ着いた時に付いた痣だと思うんですが……」

なぜ右腕に何かがあるとわかったのか、いささか疑問を持ちながらも朧は痣について説明した。

しかし、その説明を丁原は聞いていなかった。

（同じだ、あいつと……。そうか、この子は……）

丁原は一度朧を見、そして立ち上がった。

「鳳仙、力が欲しいか？」

「はい！」

「そうか、なら弟子にしてやる。ただし、私の修行はきついぞ。着いてこれるか？」

「はい！　よろしくお願いします！」

朧の顔が歓喜なものになり、朧は再び頭を下げた。

（一刻も早くこの子を”奴”に抵抗できるくらいの実力にしなければ……）

Ｅｐ．５　『弟子入り』（後書き）

次回で子供時代は終わりです。

Ｅｐ．６　『一時の別れ』（前書き）

遅くなりました！

第六話です。

どうぞ

EP. 6 『一時の別れ』

朧が丁原に弟子入りした翌日、丁原は源にその事を伝えた。

「じゃあ、あんたが朧を鍛えてくれるってことかい？」

「はい、この子は武の素質がある。ぜひ私の手で一流の武人にしてやりたい」

「そりゃあ、あんたが鍛えてくれるのは嬉しいが……朧のほうはそれでいいのか？」

「うん、僕はこの人に着いていく」

「そうか……で？　出発はいつだい？」

「今日の昼時には」

「そうか、なら朧、準備してきな」

「いいの！？」

「ああ、ただし、強くなってこいよ」

「うん！」

そう言って朧は自室へ向かった。

自室へ行くと、愛紗が朧の寝台でうずくまっていた。

「何してんの？　愛紗」

「……」

朧が聞いても愛紗は黙ったまま答えようとしない。

「愛紗、僕、丁原さんに着いていくからこの家を出なくちゃならないんだ……。だから、愛紗には元気に送ってもらいたい」

「……それが……」

「えっ？」

「それが嫌なんだ！　なんで一緒じゃダメなの！？　私、朧と離れたくない！　だって、朧のことが好きだから！」

「愛紗……」

「いや…だよう……いかないでよう……」

涙を流す愛紗。

朧は愛紗を抱き締めた。

「ありがとう、愛紗。僕も愛紗のこと好きだよ。だから、今回僕は愛紗を守る力をつけに行くんだ」

「私を？」

「そう。約束する。絶対また会いに戻るから。だから、待っててて

らえると嬉しいな」

「うん、待ってる」

愛紗も朧の背中に腕を回した。

「見送りの時には笑ってくれるかい？」

「うん！　あっ！　朧、目を瞑って」

「えっ？　わかった」

言われた通り目を瞑る。

しばらくして、チュッという音が聞こえると同時に唇に柔らかい感触を感じた。

一瞬何が起きたのかわからなかったが、すぐに口付けされたのだと気づいた。

「フフッ、無事でいられるようにおまじないしてあげたよ。頑張ってね」

そう言って愛紗は部屋から出ていった。

朧は固まったままで、我に返ったのはそれからおよそ２０分後だった。

そして昼時。

準備を終えた朧と丁原は、今村の入り口にいた。

見送りには源、椿、そして愛紗である。
「大丈夫？　替えの服とか持った？」
「椿、旅行じゃないんだぞ？」
「ハハハッ！　おばさん、ありがとう」
「でも寂しいわ。今まで一緒にいたから……」
椿が目に少し涙を浮かべながら言った。
「心配すんな。永遠の別れじゃないんだ」
「そうですよ。またここに戻ってきます」
「必ずよ」
「はい！　おじさん、おばさん、お世話になりました」
頭を下げお礼を言う。
そして、愛紗に向かい合う。
「愛紗、また戻ってくるからね」
「うん！　待ってる」
愛紗は、約束した通りに満面の笑みを浮かべた。

「それじゃあ、また」

そう言って朧と丁原は歩きだした。源達は、朧の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

朧もまた、三人の姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

朧の姿が見えなくなり、源、椿、愛紗の三人に一抹の寂しさがよぎった。

すると、愛紗が口を開いた。

「父上…」

「どうした？　愛紗」

「私、もっと強くなりたいです。強くなって朧に守ってもらうのではなく、隣に立って共に戦いたいです」

そう言った愛紗の目にも、朧が丁原に見せたような強い意志が宿っていた。

「そうか……ならもっと厳しく鍛練しなきゃな」

「はい！」

Ｅｐ．６　『一時の別れ』（後書き）

次からは少年じゃありません

Ｅｐ．７　『強く、逞しく』（前書き）

一日で二話は疲れます……

第七話です。

どうぞよろしく。

Ｅｐ．７　『強く、逞しく』

とある山。

その山奥に澄んだ綺麗な川がある。

その川には、小さな滝があり、音をたてて水を流している。

その滝の傍の河原にある大きな岩、その上に一人の人間がいた。

腰まで伸びた黒髪を後ろで一つに纏め、腰に一本の刀を差している青年で、今は精神統一している途中である。

「……」

眼を閉じ、大きく息を吐く。

そして、眼を開き刀を抜き一振りする。

そして、刀を再び鞘に戻す。

すると、滝の流れ落ちていた水が斬れ、流れがしばらくの間止まる。

それはすべて一瞬の出来事で、常人ではその太刀筋を見ることすら叶わない。

「……ふう。さて、そろそろ戻ろう」

そう言って傍に置いておいた山菜が入った籠を背負い、深い山の中

に入っていった。

青年の名は鳳仙、字は烈覇、真名は朧。
彼は修行に入ってから六年の間修行し、逞しい青年に成長していた。

少年の時よりも強く、逞しく、美しく――――
～朧ｓｉｄｅ～

「師匠、戻りました」

山の奥にある一軒の小屋。

ここには、俺と師匠が二人で住んでいる。

「ああ、戻ったか。遅かったな」

師匠の名前は丁原、字は建陽、真名は炎。
真名は修行に入った時に授かっているが俺は敬意をもって師匠と呼んでいる。
師匠も最初は抵抗があったようだが、もう慣れてしまって大して気

にしてないようだ。

「すいません、少し川の方に行ってきました」

「例の精神統一か？」

「はい」

俺が川でしていた精神統一は氣を操る修行だ。

師匠から聞いたことなんだが、俺の氣は常人よりも多くあり、流れが不規則らしい。

だから怪我をしても普通よりも二倍の早さで回復するそうだ。

確かに、打ち合いで師匠にぼろぼろにされても何日かで全快したしな…

そして、それだけではなく俺の氣は特別なんだとか…

けど、何が特別なのかはまだ教えてもらっていない。「なあ、朧よ」

「はい？」

朝食を作り、二人で食べているとき、不意に師匠が口を開いた。

「お前は今のこの国の現状をどう思う？」

「現状、ですか？」

「ああ」

どうなのだろう…
何度か麓の街に行ったことはあり、その時賊が増えてきたというのを聞いたことがある。
ということはつまり、それくらいこの国が病んでしまったということだろう。

「そうですね、良い状況とは言えないでしょうね」

「そうだな、故郷の人達が心配じゃないか？」

故郷か……。
源おじさんと椿おばさん何してるかな。

愛紗、元気にしてるかな……

「心配のようだな。なら行くと良い」

「えっ！？　しかし……」

「お前の修行はもうほとんど終わっている。六年間よく頑張ったな」

「本当ですか……！？」

それが本当ならすごく嬉しい。
これでやっと常平村の人達に、源おじさんに椿おばさん、そして愛紗に会える。

「わかりました。なら、明日には出発します」

「そうか、なら今日は酒を飲むとしよう。私からお前への送り酒だ」

その晩、俺と師匠でささやかな宴をした。
本当にささやかだが、とても楽しかった。
師匠と飲んだのは初めてだし、俺自身、酒を飲んだのも初めてだった。

師匠は昔話をしてくれた。

何でも昔はどこかに仕えていたそうだが、どこに仕えていたのかは教えてくれなかった。

そして翌日――――

「師匠、六年間お世話になりました」

「ああ、よく頑張ったな。ところで、村に帰ったあとはどうするんだ？」

「あとですか？」

「ああ。そのままそこで暮らすのか？」
村に帰ったあとか……。
まあ、答えは決まってる。
「各地を旅して見聞を広めたいと思っています」
「そうか、なら良いものがある。少し待っててくれ」
そう言って師匠は小屋の裏に行った。
あそこは確か厩だったよな……。
しばらくすると、師匠が雄々しい鬣と、大きな体躯を持った馬を一頭連れてきた。
「こいつは私が乗っていた馬の子供なのだが、お前が乗ってくれ」
そう言って手綱を渡された。
「こんな立派な馬、本当にありがとうございます」
「気にするな。しかし、名前を考えていないんだが、お前がつけてくれ」
「なら……俺の名から一字取って『鳳凰』と名付けます。よろしくな、鳳凰」
俺がそう言うと、鳳凰は嬉しそうに擦り寄ってきた。

「嬉しそうで何よりだ」

「はい、それでは師匠、今まで本当にありがとうございました」

俺は師匠に頭を下げた。

「ああ、お前の武勇が大陸に響くことを期待しているぞ」

「はい！」

こうして、俺は師匠に別れを告げ常平村目指し歩き出した。

Ｅｐ．７　『強く、逞しく』（後書き）

これからは基本的に主人公視点で行きたいと思います。

Ｅｐ．８　『悲しき報せと、固めた決意』（前書き）

小説って本当に難しい　ｏｒｚ

皆さんに満足してもらえるか心配になってきた今日このごろ。

Ｅｐ．８　『悲しき報せと、固めた決意』

修行をした山からおよそ一週間かけてようやく常平村に辿り着いた。

「はあ～～！　六年ぶりだ！　みんな元気かな～」

大きく伸びをし、息を吸う。

この臭い、まるで変わらないな……。

「っと、こんなことしてる場合じゃない。早速会いに行くか」

俺は胸を踊らせながら、村外れを目指して歩き出した。

村外れ。

そこにある一軒の家。

「すみませーん！　椿おばさん、源おじさん、愛紗、俺です、朧です！」

戸口に立って呼び掛ける。

どんな顔するだろうか？

楽しみだ。

「朧…くん…？」

少しして、椿おばさんが出てきた。

「本当に朧くんなの…？」

「椿おばさん、お久しぶりです」

しばらくの間固まっていたおばさんだったが、我に返るとぼろぼろと涙を流し、俺に抱きついてきた。

「お、おばさん！？」

「良かった！　本当に良かった！　あなたは生きてたのね！」

最初は再開できた嬉しさかと思っていたが、その言葉を聞いて耳を疑った。

「『あなたは生きてた』って、どう言うことです…？」

それじゃあまるで俺以外の誰かが死んだみたいな言い方じゃないか……。

そういえば、まだ愛紗と源おじさんを見ていない。

この時間帯ならもう家にいるはずだ。

「おばさん！　源おじさんは？！　愛紗は？！！」

俺はおばさんの肩を掴み聞いた。

「源さんは……死んでしまったわ……」

それを聞いた瞬間、全身から力が抜けたのを感じた。

「あれは、一年前のことよ……」
椿おばさんは俺を家に上げてくれた。
そして、俺を座らせ、その時のことを話し始めた。
「いつもと同じように、一日の仕事を終え、村中が夕食の準備に取りかかってた。私も、稽古から帰ってくる源さんと愛紗のために美味しいものを作ろうと思ってた。けど、その時、賊がうちに入ってきたの」
「！！、入ってきたって、ここは村外れですよ！　誰にも気づかれずにここまで来るなんてことができる分けない！」
「普通に考えたらそうね、でも、彼らは商人に化けて手際よくここまで侵入したの」

――――――――――――――――――――

「おい！　大人しくしろ！」
私は侵入してきた賊の一人に取り押さえられ、身動きができない状態にある。
普段おっとりしていると言われている私でもわかる。

これは非常な不味いことだと。

賊達はいやらしい笑いを浮かべて私を見ていた。

「しかし、こんなところで良い女を見つけたぜ。村を襲う前にヤッちまうか？」

「いいなー！　俺もするぜ！」

そう言うと、賊の一人が下穿きを脱ぎ近付いてきた。

私は恐怖で声を上げることすら出来なかった。

ましてやここは村外れ。

叫んでも誰か来てくれり保証もない。

私は目を瞑った。

これから来る地獄を覚悟した。

「ぐえっ！！」

しかし、急にその賊はそんな声を漏らすと、倒れこんだ。

「誰だっ！！」

仲間が騒ぎ出す。

戸口に二人の人物が立っていた。

私の目には、その二人が太陽の光よりも輝いて見えた。

「おい！　てめえら、人の嫁に手を出してただで済むと思うなよ！！」

源さんが青龍偃月刀を構え、そこに立っていた。
隣には、同じような偃月刀を持った愛紗もいた。

「母上っ！！　どけ賊共！！」

愛紗がその顔を般若に変え賊達を薙ぎ倒していった。
そしてすぐさま私の傍に駆け寄ってきた。

「母上っ！　しっかりしてください！」

「大丈夫よ、愛紗。ありがとう」

「良かった……」

目に涙を溜め、私の手を握った。

源さんもゆっくり近付いてきた。

その時である、斬られたはずの賊の一人が起き上がり、愛紗に剣を突き立てていた。
しかし、愛紗はこれに気づくことはなく、賊は剣を動かした。

「愛紗っ！！」
「愛紗あぶねえ！！」

私が叫んだのと同時に源さんは動きだし、愛紗と私を突き飛ばした。
そして――――

「ぐはっ！……」

源さんの左胸に剣は突き刺さった。

「父上っ！！」
「源さん！！」

源さんが倒れこむ。
同時に賊も倒れ、再び起き上がることはなかった。

「父上っ！　どうして！　どうして私を庇ったりなんか……」

「バカ野郎が……自分の子供を守らねえ親がどこにいる……」

仰向けにし、左胸を押さえる。
しかし、血は止まらず、むしろどんどん流れていく。

「愛紗……お前は生きろ……。朧とまた会う約束してんだろ……？」

「！！」

愛紗の頬を涙が伝った。

「椿……すまねえ……悪いが、先に逝かせてもらうぜ……」

私の頬にも涙が伝う。

源さんは、その涙を優しく拭った。

「おいおい、泣くんじゃねえよ……。せめて最後くらい、笑顔で送ってくれ」

こんな状況で笑顔なんて作れる分けない。

でも、そんな思いとは裏腹に顔は笑顔になっていき、

「おやすみなさい、源さん。また会いましょう」

そう言っていた。

「ああ、おや……す……」

源さんは目を閉じ、そのまま二度と目を開けることはなかった。

――――――――――――――――――――

「そして、葬儀を済ました一ヶ月後に愛紗は村を出たわ。これ以上、

私達みたいな被害者を出さないためにって…」

「そうですか……」

言葉がでなかった。

ただ悔しかった。

俺がいれば変わっていただろうか。

源さんは死なずに済んだだろうか。

話し終えたあとの椿おばさんは今にも泣きそうで、潰れてしまいそうだったに違いない。

それを言うなら愛紗もだ。

愛紗も尊敬していた父を失ったのだ。

本当なら椿おばさんの傍にいて守り続けたかったのだろう。

しかし、愛紗は自分の利より他人の利を優先する。

この国にはまだ自分達のような悲しい思いをしてしまっている人達がいるかもしれない。

だから旅に出たのだろう。

なら俺はどうする？

旅に出るのをやめ、椿おばさんを守っていくか、それとも、愛紗を

探し、愛紗の助けをするか……。
どちらを選んでも一人しか守れない。
だったら、力のない椿おばさんを守っていくか？
そんなことを考えていると、椿おばさんが口を開いた。
「朧くん、私のことは良いから、愛紗を手伝ってあげて」
「えっ！？　でも……」
「良いの。私は十分救われたわ。でも愛紗はまだ救われてない、あなたを探し続けている」
そうか、そうだった。
そもそも俺がこの武を身に付けたのは、守るためだ。
大切なものすべてを守るために強くなった。
愛紗もだって救ってみせる。
「わかりました。俺も旅に出ます。愛紗を助けます」
「お願いよ」
椿おばさんはそう言って微笑んだ。
その微笑みは、とても綺麗だった。

翌日、俺は椿おばさんに別れを告げ、常平村をあとにした。

待っててくれ愛紗。

俺が必ず会いに行くから！

Ｅｐ．８　『悲しき報せと、固めた決意』（後書き）

やっと次回に原作キャラが出ます。

……本当にやっとだ…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1605z/

真・恋姫†無双 －Rise of dragon－

2012年1月6日12時46分発行